◆小 論 文〈総合文化科学課程　芸術コース音楽専修〉（推薦入試）　福岡教育大 '99

次の文章は，現代の日本を代表する作曲家である細川俊夫の著作から引用したものである。これを参考にしながら，地方都市における音楽文化の在り方について論じなさい。なお書式は，横書きで800字以内とする。

最近は地方都市で，よく音楽祭が行われるようになった。しかし多くの音楽祭は，地方で開催しても，ただ東京で行われているものを地方に持っていくに過ぎない。お客さんが違っても，音楽の内容はほとんど同じだ。日本中が東京文化の下請け産業のような感じがする。地方都市の持っていた固有の響きが少しずつ失われ，東京文化が日本中を均一化していく。外国人が日本に来て驚くのは，どの都市も同じような外観を持っていることだ。自然の風景は違っても，都市の風景は恐ろしいくらいにどの都市もよく似ている。

音楽文化の場合，とりわけその傾向が強い。東京から発信される商業主義の音楽は，極度に発達したさまざまなメディアを通して，日本全国の音楽性を同じものにしてしまった。北海道でも沖縄でも，人々は同じ歌を聴き，同じ歌を歌う。クラシック音楽産業も，東京で招いてきた海外音楽家，あるいは東京で評価された日本人音楽家を全国に回し，東京だけでは補えない経済的な補充を地方都市でする。その際，地方の人は遅れているからという理由で，巡業公演はよく知られた名曲を繰り返し繰り返し演奏する。

バブル時代には，地方都市に次から次へと新しい無目的なホールが生まれた。その中身をヴィジョンを持って企画，運営できるような人材はあまりいない。そこに東京のプロデューサーが入り込んでくる。彼らの多くは何のヴィジョンもなく，日本の音楽が今世界の中でどのような位置にあるかということなど考えたこともない。ただ海外で成功した音楽家を連れてきて，習慣的なプログラムとコンサート形式で地方に売って歩く。

日本を離れて外国で仕事をしてみると，そうした日本の構造がよく見える。東京という都市が音楽のマーケットとしてすぐれた都市であることはよくわかる。しかしそこから，これまでに一度でも，現代世界をリードしていくような音楽が生まれただろうか。創作の世界だけではない。ヨーロッパでは古典の演奏でさえ，常に新しい解釈による新しい演奏が時代を切り開いてきた。東京はそうした海外で生まれたものを，ありがたく貰って，消費する場所に過ぎない。（略）

東京に何か可能性があると思うのは大きな幻想なのだ。それは東京の内部に安住している人には見えないだろう。だとすると，それは東京の外にいる人たちが地域全体の動向を見守りながら，東京中心主義を批評していくしかない。

しかし現状はまったく悲観的で，地方の人たちはいつまでたっても東京に頭が上がらない。そして東京に評価されることのみに心を配っている。行政も文化も皆同じである。そして東京の下請工場としての地方は，ますます固有の顔を失っていく。

（『魂のランドスケープ』細川俊夫著，岩波書店，1997年より）